

漢語学習熱

ホータン市内から車で一〇分位行ったところに、ライカ郷がある。そのライカ郷中学で漢語とウイグル語のバイリンガル（双語）の実験クラスが設置されている。これはウイグル語と政治科の授業以外（数学、理科、化学など）は漢語で授業を行うというものである。ホータンの農村部の学校ではここが唯一であり、生徒は四五名である。新疆では小学校において、何年も前から漢語教育は行われていたが、教師の能力が低いこともあって、効果がほとんど上がらなかった。それを改善するため、市内から二名の教師を派遣して漢語教育を行っている。

ホータン地区では二四の実験クラスをつくり、一二〇〇人の生徒がそこで学んでいる。ほとんどのクラスは民族学校ではなく漢人の学校の中に設置されている。ホータン地区では基本的に小学三年から漢語授業が始まるが、条件さえあれば一年から始める学校もある。このようなクラスに入りたいと希望する生徒は増えていて、漢語学習熱が高まっていると伝えられるが、その原因として、ウイグル人の商人の言葉を引いている。「ウイグルの工芸品を売るため内地に行ったが、言葉が通じないと商売にならない。自分の子供には漢語を話せるようになってもらいたい。」

教育委員会の幹部はその原因について次のように言っている。

- ① 内地新疆中高班ができて、少数民族の子弟が競ってそれに応募するようになった。（二〇〇〇年から、内地の北京、上海など一二の都市の高校に新疆クラスをつくり、学費などほとんどを政府が負担して、少数民族の生徒を呼び寄せ、漢語を習得してもらう制度ができた。これは少数民族地域のリーダー養成でもある。ホータンでも人気が高く、各中学はこれにどれだけの生徒を送り込むかの競争をしている。また、親も選抜を望んでいる。）

- ② 社会的発展が「民漢兼通」（ウイグル語と漢語の双方ができる）の需要を高くした。（この社会的発展とは「西部大開発」による経済的変化であろう。ホータンでもその変化は目に見えて激しい。しかし、スーパーマーケット、ホテル、病院、道路などが建設され、内地の都市と同じようになり、上海など内地の資本と人が流入するだけの

ことのように見える。))

① 時代も変わり、人々の認識と思想を進歩して、人々の交流のため言語の障害を取り除こうと考えた。

④ 教育委員会が実験クラスを推進した。(1)

このような漢語学習熱は少数民族の多い南疆の他の地域でも見られる。カシュガルに近いクルグス自治州では第一小学校(漢人学校)に多くのウイグル人を主に、少数民族が入学し、五〇%を占め、多民族小学校になってしまった。すでに教師不足になり、入学を断っているという。(ウイグル語、カザフ語を母語とする高校生を学費などの優遇とともに新疆大学、新疆師範大学などに入学させ、漢語教師養成を急ぐ試みが始められている。一〇〇七年の報道)をすぐ近くにある第二小学校は歴史のある民族小学校であるが、入学者が少なく寂しい状態になっている、本来は六〇〇人いるはずなのだが、一八〇人しかない。カシュガルの民族幼稚園では漢語を教え始めたといわれている。(2)

このような変化は政府側の報道(インターネット)が伝えるものであり、どれも伝えられる内容が画一的であり、これと反対の動きはないのかどうか、全体としての動きはまだ不明なところがある。しかし、漢語を身につけないと、就職、進学、商業活動などが困難になることは確かである。だが、漢語を身につけたからといって、生活がうまくいくとは限らない。別の観点から見ると、このような言語をめぐる動きは、ウイグル人のアイデンティティとしてのウイグル語という側面を強くしている。だが、教育言語としてすでに大学ではその地位を失い、中学、高校の実験クラスでは大学と同じになり、小学校のレベルでは漢人の学校に行つて、早くから漢語を身につけようとするウイグル人の子弟が多くなっている。誰が、何時、このアイデンティティの危機に声を上げるのだろうか。

本章はウイグルの漢語教育、つまり中国の少数民族に対する共通語の教育が長年行われてきたのになぜ効果がないのか、その問題から出発する。ウイグル人は大学に入学しても多くの人はまず漢語学習をしなければならない。ウイグルの大学でも教育言語は漢語であり、それについていくためには漢語の能力を上げる必要がある。小学校から漢語を学んでいるのになぜ習得できないのであろうか。

漢語教育体制の不備はその大きな原因であろうが、ここでは外国語教育の基本的な見方を問題にしたい。ウイグルでも当然ながら、日本の英語教育のようにカリキュラムの一つとして、他の科目と同じように教えられる。だが、外国語教育、少なくとも聞くこと、話

すことという実践的な側面に関しては、学校教育の形式的な知識の伝達では効果がない。言語の読み書きと、話す聞くの両面は大きく異なっている。会話、談話、雑談などは形式知であるより身体を使う知識である。また、一人では会話はできないから、同じ見方を持つ集団、共同体を形成して学習するほうが効果的である。このような観点から、身体知としての自然会話と実践共同体について論じていく。

ウイグル語の危機

近代の言語はまず教育言語として存在し、教育の場からはずされていくと、衰退する。中国政府の方針転換は、重大なことであり、法的に行われているように見えるが、単に共産党委員会からの通達でことは運ばれる。ウイグル人にとっては自らの文化を侵害されることなのだが、表立って反対する動きも、手段もない。それより漢語とウイグル語を両方とも使用できることは悪いことではないと思いついて始めている。それで自分を納得させている感じである。ホータンでは知識人など上の階層ほど、自分の子弟を漢語が話せる環境に置く傾向がみられる。将来的に二言語使用がどのようになるかは、かれらも見通しが立てられないまま、とりあえず現実の変化についていく姿勢である。

しかし、この二言語使用がどのような結果になるか、ウエールズ語の歴史は一つの参考になる。「宗教や詩の強力な媒体である自分たちの言語が、十九世紀世界の文化の中であらゆる目的にかなう言語かどうかを疑った——つまり、二カ国語使用の必要性和利点を考えた——のは、十九世紀のウエールズでウエールズ語を話し、その使用を主張する人たちであった。英語を話すウエールズ人には、全英の職業に就く可能性があることを彼らが自覚していたことは疑いないが、だからといってそれが、彼らの古来の伝統との感情的絆を弱めるものではなかった。このことは、自分たちの言語が結局消滅してしまうことを甘受した人々の間でさえ明らかである。」⁽³⁾

このような動きは一八四〇年ごろであるが、それから四〇年後、社会主義の理論家であるカール・カウツキーは次のようにいつている。「民族の言葉はますます家庭内の使用に制限されていくだろう。たとえ実際にはあまり役に立たないとしても、家庭で代々受け継がれてきた家族の古い家具のように、それはなにかしら尊敬の念を持って取り扱われるだろう。」⁽⁴⁾

社会主義の言語理論では少数民族の言語はより大きな民族の言語に吸収されるという普遍主義的な傾向があり、このような考えは当然であろう。ネイションになる可能性のない

小さな民族であれば、その民族語はそうになる運命である。言語ナショナリズムとは、公教育における言語ならびに公的に使用される言語を問題にする。「ウエルズの学校では英語だけでなくウエルズ語でも授業すべきかどうか、ウエルズ語だけで授業すべきかどうか、道路の名前を何語で表記すべきか、テレビ、ラジオなど何語で放送すべきか、議会の議事録は何語か、役所の書類は何語か、などの問題にかかわる。ウエルズ語がまだそれなりにしっかり保持されていたとき、もしウエルズ語が存続すべきならば、それをもう一度公式の言語とし、教育において使用させることが必要だと悟った。」⁽⁵⁾

ウイグル語とウエルズ語では、歴史的背景が違い、ウイグル語が同じような歴史的運命をたどるとはいえない。ただ、教育言語が漢語に限られてしまうと、少数民族の言語の将来は明るくない。当局が正統派のマルクス主義的言語観をもっていけば、なお危ない。このような新しい漢語教育、学習の状況の変化はこの先、ウイグル人の漢語使用能力にどのような影響をあたえるかわからないが、いままで何年間も小学校から行ってきた漢語教育はあまり効果的でなかった。その原因のひとつと考えられるものを本論では考えて行きたい。これはウイグルだけでなく新しい言語を習得する際に、ある程度、普遍的に適用できることである。

レイヴとウエンガーの実践共同体

今は少なくなったが、文化の伝達、いわば「教育」は徒弟制の中で行われてきた。この徒弟制をモデルとしてかれらは「実践共同体」という学校制度とは違う学習モデルを作り上げた。リベリアのヴァイ人などの仕立屋の手工業徒弟制についての研究において、「すなわち、日常の仕立て作業で、ことさら教え込まれたり、試験を受けたり、あるいは機械的な真似事に終始するといったことがないままに、どうやって徒弟が、共通の、構造化されたパターンの学習経験に従事できるのか、それでいておどろくほどの少数の例外を除くと、みんな技能に長けた、尊敬される仕立屋の親方になれるのかというわけか、」⁽⁶⁾ という問いに答えることから始まった。

この徒弟制における学習は、彼らを取り巻く状況すべてに関係している。そこから「状況に埋め込まれた学習」という概念が出てくる。それは「知識や学習がそれぞれ関係的であること、意味が交渉で作られること、さらに学習活動が、そこに深く関与したものであること」⁽⁷⁾ などの条件がある。

次に、「正統的周辺参加」という聞きなれない概念に移っていき、これと対照的な用語

との対比で説明される。つまり「非正統的周辺参加」はありえないのである。参加の正統性は所属の仕方の本質を定める形式であり、学習にとって決定的条件であるばかりでなく、その内容の構成要素である。この実践共同体に参加するからには、その所属の仕方は真正で正統であるしかない。それ以外は参加をやめてしまっただろう。「周辺性」についても「中心的参加」というものは存在しない。周辺性という意味には、参加の場には複数の、多様な参加があり、少なく参加する、十分に参加する仕方もあることを意味する。参加者の自発的意思を重要視した肯定的な概念であろう。

本論では漢語学習の場をこの実践共同体とみなす。実践共同体に参加していないから、学習が成功しないと仮定して論を進めていく。その説明のために、移民のための米国の米語学習についての論文を紹介しておこう。(8)

この論文の基礎にあるのは、人々が共同体とその活動に望ましい形で参加し、また、それがこの世界で明確に意味あるものになるために学習するという理解である。人々はただ学習するのではなく、何かになるために学習する。したがって、学習は何かになるために形成された共同体に深く関与し、アイデンティティと不可分である。この視点は個人を共同体にリンクして、認識を社会的なものにつなげる。実践の共同体は、ある企てに関わり、為す方法、話し方、価値、信念、要するに実践を共有し、発展させている人々の集合である。他の実践のように言語は、学習者に最も重要である実践の活動と共同体のコンテキストにおいて学習するのが最も良い。実践の共同体において適切な方法で言語を使用するのは参加に不可欠であり、そして、参加は言語を学習するのに不可欠である。

米国民権を求める個人のために提供される英語のトレーニングは、学校において行われることが多い。この種類の言語教育は効果が疑わしいが、それは大人達には特に問題が多い。大人の社会的な参加に学校活動がないからである。学習者が英語を使う状況を考え、その状況に身をおいて言語を学習するようにサポートするのは、学習者に言語的戦略を展させる最も明確な道である、それによって意味のある参加を獲得する。学習者にとって英語を話す共同体に参加させる機会は重要であり、英語の学習を助ける最も確かな方法である。

新しい言語を学ぶのは、人の言語的な発展の連続である。古い言語の代替手段としてより、むしろ言語のレパートリーへの新しい追加である。大人の英語の学習者は、自分の言語と他の言語との関係を作ることが重要であり、他の言語を学習するために、自分の言語を捨てることではない。各言語と実践はもう片方の言語のリソースになるかもしれないか

らだ。多くの人々の多重共同体は非英語の単一言語の実践共同体、およびバイリンガルの、そして、多言語の共同体にかかわる。そこにおいて、共同体実践は一つ以上の言語の複雑に構造化された使用にかかわる。彼らがバイリンガルの、または、多言語の知識を造る際に支えることは、彼らが彼らの人生の知識と実践を統合することを支え、アイデンティティと個人史の連続性を与えることである。

実践共同体に参加するとは当然ながらそこに身をおくということである。十全の参加に進みながら、身振り、話し方、歩き方など、モースの言う「身体技法」を身体の中に刻み込んで行く。このような言語を習得する学習共同体の場合、話すことと身体はどのような関係にあるのだろうか。

まず、ウイグルの漢語教育は、実践の共同体のかたちを成していない。単に学校教育の中の科目として教えられているだけであり、漢語を習得したいという強い動機があるわけではない。さらに、実践もしくは状況と漢語学習がほとんど関係していない。ホータンでは特に農村部では漢人がいないこともあり、漢語を使うことも、必要性もない。漢語が使われる状況とは無縁の世界である。ホータン市内に行けば、漢人は多くなるが、ウイグル人との日常的な付き合いはほとんどない。新しくできた西洋医学の病院の医師はほとんど漢人であるが、ウイグル人を呼び込むために、通訳をおいている。ラジオ、テレビなども一応ウイグル語のでの番組もある。ホータンを、進学や、北京や上海での商売ではなれる人には漢語は必要であろうが、それ以外のウイグル人はウイグル語だけで完結した世界をいまだに形成している。

このような世界では、自然な発話ができるような状況はつくりにくい。次の「雑談」からはじまる、ギブソンのアフォーダンスの説明に論を進めたい。言語の習得とはこの「雑談」、自然な発話が可能になることであるからだ。だが、会話を含めたコミュニケーションは相変わらず情報处理的なモデルのイメージにわれわれはとらわれている。

情報处理的なコミュニケーション・モデルと会話音声の機械認識(9)

この章と次の章では、会話というコミュニケーションについて、通常考えられていたモデルが機械的であり、人間の自然な会話はそのモデルではとらえることができないこと、それを乗り越えるために、「アフォーダンス」、「身体知」などの概念を使い、意識や主体といったものではなく、むしろそれを取り巻く環境との相互作用の重要性に着目して論を進める。この論議は主にインターネットで公開された論説によるところが大きい。

これまでのコミュニケーション観とは、コードモデル(coding/decoding model)の概念に代表される。例えば、電気通信などの原理を考えると、何か情報やメッセージを伝えようとしたとき、そのメッセージを一旦何らかのコードに符号化し、そのコードを通信回線に載せ、受け手はそのコードを解読する。その伝送における効率性や正確さなどが問題となってくる。われわれのコミュニケーションでも、自分のメッセージを言語表現に変換し、それを相手に解釈してもらおう、という実に分かりやすい方略を基本的には用いている。こうした枠組みはコードモデルとか、間接認識論と呼ばれ、音声認識や対話理解における基本的な枠組みでもある。だが、これでは、我々の日常でのコミュニケーションの前提として、何かより根源的なものが説明しきれないし、何か欠けている。

「情報処理アプローチ」は、我々の行動や、行為をナビゲートするために、事前に用意された「プラン」もしくは「運動プログラム」が存在し、そのプランや運動プログラムによつて我々の身体が制御されるという立場である。これはちょうどコンピュータのメタファーに従って、われわれの「身体」の制御をそのまま捉えた考え方である。我々の「身体」はその外側にある「心」や「脳」によつて制御されるという考え方が基本になっている。これは心身二元論といったデカルトの機械論そのものである。その典型が機械による音声言語処理である。だが、次に述べるように大きな壁にぶつかっている。

現在の音声認識の技術レベルは、明瞭な発声で読み上げた文章は、概ね正しく書きおこしができるまでになっている。また、カーナビなどで利用されているようにある程度の騒音下でも認識はできている。しかしながら、「話し言葉」や、知人同士の「対話音声」については、まだ認識性能は低い。また、対話において、発声者の意図を読み取る、状況を判断することはできていない。

音声認識や自然言語処理の性能は、一九九〇年代に統計的手法により大きく進展したが、現在大きな壁に直面しているように思われる。現状の音韻認識率は人間より劣っており、また、韻律情報は使われていない。意味処理、文脈処理、対話からの意図抽出・状況判断ができていない。二〇世紀はデジタル情報処理技術が大きく進展したが、認知や学習のメカニズムは解明できていない。人間の会話音声認識してテキスト変換する企業向けソフトウェアはなんと四〇〇万円以上もする。⁽¹⁰⁾

このような機械認識が苦手とするものが雑談である。雑談(会話)とはダンスのようなものだ。次のステップを考えながらでは、そのダンスはギクシャクする。同様に、次の発話を考えながらでは、雑談にはならない。ある意味で、「身体が勝手に動く」、あるいは「二

つの身体が勝手に協応する」という側面が流暢な雑談を支えている。「考えすぎてしまうと雑談にならない」、「意識してしまうと雑談にはならない」といえる。「雑談が苦手なのはその論理的な構成が下手だからだ」ということだけではない。むしろ、考えすぎて自分の口が勝手に回っていかない、相手の身体と自然に協応しない、といった辺りが問題なのではないか。われわれの身体の動きをナビゲートするのは、必ずしも「意識」だけではない。

自分が本当に伝えたいことは会話の中で生まれてくる、あるいは結果として会話の目的のようなものが立ち現われてくる、会話することそのものが目的ともいえる。「伝えたい、伝えようとして伝わること」と「結果として伝わってしまうということ」、コミュニケーションには本来そういう二面性がある。

しかし、われわれの日常的なコミュニケーションや自然な発話(spontaneous speech)を扱うようになると、従来の知覚観なりコミュニケーション観では、いろいろ説明のつかないことが多くなってくる。

アフォーダンスと身体 (11)

ジェームス・ギブソン(J.J.Gibson)のアフォーダンス(affordance)という言葉に代表される知覚理論によれば、知覚とは「対象とひとつのシステムを作ること」である。

何気ない散歩の途中で、あるいは車の運転を覚える過程で、われわれの身体は自分の行為の意味や価値でさえも、自分では完全に与えることができないことを悟る。身体に起因するこうした基本的な制約は「行為の意味の不定性」といえる。何気ない行為は常に環境と繋がるようにする。無意識的に、あるいは自発的(spontaneous)に繰り返される行為の多くは、この環境に委ねる、支えられるという振る舞いがいつもついている。こうした投機的な行為は「何気ない行為 entrusting behavior」と呼ばれる。

日々の何気ない行為を基礎とする透明化、身体化の過程は、われわれの手や口、言語使用の場面でも生じている。何気ない会話のなかで、「柱・・・、黒い、黒い柱が、おっきい黒い柱がぬつと・・・」といった、漸次的精緻化(incremental elaboration)といわれる振る舞い、これは、自発的な発話における「意味の不定性」に起因する、自分の発話の意味を環境の中で見出すための必須の行為である。つまり、自発的な発話における一種の何気ない行為なのだ。ことばを紡ぎだす発話などの機構がすでに透明化し、身体化した状態にあっても、行為は環境に対して、その意味を再確認し、新たな環境との間で常に協応

した状態を維持しようとする。ことばを話す、流暢な行為を生み出す背後に、自分の行為の意味を一旦環境に預ける、委ねるといった基本的な行為が内在している。

われわれの何気ない発話の意味や役割は基本的に不定、もしくは不確定だから、つねに他者を共犯者にして、お互いに繋がるようにする。他者とのかわりの基底に、こうした行為の意味の不確定性に起因する関係性が内在している。他愛もない雑談のなかでの自分と他者との関係を、自動車の運転になじむように、透明化し、身体化して、他者の身体の一部を自分の身体になじませながら一つのシステムを作り上げようとする。これは他者理解の方策でもある。自分の言葉の意味や役割は自分で決めて、自分が一番よく知っているという個体主義能力とは別のものである。

「Aという個体からBという個体に情報が何らかの形で伝わる」という側面だけではなく、むしろ二つの個体が繋がる、何らかの関係性を備えるという側面でもみていく必要があるのではないか。コミュニケーションを「伝える」から「繋がる」という側面でもみていくということである。

エコロジカル・アプローチによれば、コミュニケーションにおいては「身体」の役割が重要である。認知科学とかロボティクスの分野の研究の中では、哲学でいう心身問題というよりは、「身体」というものが脳の操り人形として動いているのではなく、「身体」そのものが環境との関わりにおいて、もっと自律的に動いている。そこで「心」というものは、本来身体的な行為が環境と関わる中で、身体的なものとして出現して、存在するようになる。その「身体」が環境と接することで心を作っていく、あるいは行為を通して環境と関わって、それが一体となって発達していくのが「身体」なのである。

日常場面で我々の振る舞いをナビゲートしているもの、そういった「情報」は、自分の頭からの指令としてだけではなくて、むしろ「環境にある」ということを、ギブソンがいうようにしている。その「情報」は行為者の動きと環境との関係性の中から立ち現われる。それらを「身体」がピックアップし、その「情報」に基づいて、次の行為を組織化している。この行為システムと環境との協応ということを基礎として自分の「身体」の制御を与える。

我々の日常で何気なく無意識にやれる行動というのは、「自分で情報を集めて最適な経路を計算して進む」というやり方ではなくて、むしろ「環境に行為を仕向ける、環境を動かそうとする行為の中から結果として、その環境からピックアップされる情報に導いてもらう」という逆の考え方を取る。そういう方略に方向転換してみると、意外と楽に、かつ

最適性もそれほど損なわずに合目的な行動をとれる。「仕事の早い人ほど自分の頭で考えることをしない」などといわれる。それは決して頭を使わないという意味ではなくて、むしろ周りから情報を集めて行動できることには限界があることをよく知っている。あるいは自分で情報を集めて最適な行動を取る、そういう計算の限界をよく知っている、むしろ、環境との間に備わる計算機構の存在をよく知っていて、かつ環境との間に備わる情報をピックアップする技を心得ている。自分が一人で情報をかき集めて何か行動するというよりは、むしろ周りの人を動かす。自分ができることの範囲というのは決まっているので、むしろ「環境に働きかけて、その環境から情報を得て、その環境から動かしてもらう」という方略を取っていることになる。そういうことを周りの人も一緒にやっているから、同時に多重の制約が加わって、その空間に、自分と環境との間にリッチな「情報」が備わることになる。もう一つは、計算機構が自分の「頭の中」にあるのではなくて自分と環境との間に計算機構が備わると考えるわけである。

「行為が身体化している」とはどういうことなのか。メルローポンティの「杖のメタファー」でいうと、視覚障害者が杖を持って歩く時、最初は杖の先にあたる石ころを知覚する時に杖の先に石ころを感じている。ところが段々と慣れてくると、「杖」というものが透明化して身体化してしまう。自分のその石ころを直接に知覚することができる。われわれの車の運転というのも、自分の身体の延長として「車」というものが透明化してある。これは何かを話すという場合もある意味で同様で、行為そのものが身体化してしまう、道具化してしまう。「頭の中」での計算やその指令から離れる、「身体」がある意味で勝手に環境との間で意味を作り出しながら、自分自身の行為を導いていく。「身体化する」ということは、頭の中での計算から、その主体と環境との間に備わる創発的な計算機構への基本的なシフトというように捉えられる。

環境との間に備わる「情報」に自分の行為を導いてもらう。その時に、環境が我々に与えてくれる「行為の可能性に関する情報」が「アフォーダンス」である。そのアフォーダンスをピックアップするような「身体」を耳や目といった感覚受容器と区別する意味で、「知覚システム」と呼んでいる。「身体」そのものが知覚システムである。自分の行為の可能性をピックアップする時に、身体を動かしながら、環境から自分の行為の可能性についてのピックアップする、そういう「知覚システム」そのものが「身体」である。

ウイグルの徒弟制

実践共同体の中で、身体そのものが知覚システムとなる身体知によって、学習していくのが徒弟制である。日本では近代教育の普及とともにあまり見られなくなった徒弟制もウイグルでは活きている。むしろ、最近の経済的、社会的変化によって、増加しているのかもしれない。そのことを次に紹介したい。(12)

一九八〇年代に入ってから顕著になった現象として、公的な学校教育を途中退学して、伝統的な手工業などの職業者に徒弟として弟子入りし、その職業の実践的な技能の教育を受ける子どもたちが増加したことが挙げられる。たとえば、カシュガル市の学校では一九八九年だけで三七〇名の中学生が学校を途中で退学しているが、そのうち八六名が伝統手工芸を習いに弟子入りしたことを明らかにしている。カシュガル市内の工房や店舗で働いている子どもたちの数が、五四三名に上っている。

このような弟子入りが存在するのは、伝統的なウイグル人社会の考え方が基礎にある。ウイグル人は元来、「マハツラ」と呼ばれる特有の共同体を生活基盤に置いてきた。ウルムチなど近代的な都市化を遂げた地区を除き、ウイグル人口の八〇%以上がこうした元来の居住地域であるオアシス地帯のマハツラに住んでいる。ここで注目したいことは、これらのマハツラ付与されている呼称である。マハツラ呼称には、様々な職業の名称に由来するものが多い。例えば、ホータン地区カラカシュ県の西に位置するチャイ・マハツラは、かつて祖先がお茶の商売を営んだことに由来し、シヤン・マハツラは、祖先がブーツを作って生計を立ててきたことを意味する。また、往時の交通手段であったらくだの飼育を職業としていたマハツラのことを、タイラック・マハツラと呼ぶような例もある。さらに、床屋業を営んでいたサトラシ・マハツラ、草で縄を作つて販売していたクラ・マハツラなどもある。現在でもマハツラの職業がそのマハツラの地名として呼ばれることが多く、人々の生活の基盤を反映している。

このことと関連してもう一つ重要なことは手工業が、農業を営んでいる農家の生活と不可分の存在であり、しかもそのことはオアシス農業を取り巻く環境条件と無縁ではない。農村部における特有の伝統的な手工業は、このような生産活動は農家が農業との兼業という形態において農閑期に行われ、したがって職人も多くは農家の家族である場合が多かった。

ホータン地区カラカシュ県スズ村の伝統的な手芸技術（職人技術）は歴史的に発達していた。昔、製品は自家用以外に、物々交換が中心であり、手芸技術は主になめし皮を営む家が多く、収入も僅かであったが、現在では、なめし皮、織物、縄より、鉄器、木器、裁

縫、帽子屋など多岐にわたり、その収入も家計の重要な部分になっている。そして六〇%以上の農家が職人を兼業している。

このスズ村の農家ミラブさんは四五才である。家計を助けるために、毎年十、十一、十二月の三ヶ月は集中的にウイグル人愛用の帽子を作っている。帽子作りはこの家の主な収入である。この家の主人ミラブさんは現在十六才になる息子にその技術を教えている。実際、現在でも、少ない耕作地からの収穫だけで生計を立てるのは難しく、悪天候に見舞われでもすれば、その年は収入がほとんどなくなってしまふ。このようなオアシス農業の直面する厳しい環境において、何か手芸技術を持つていれば、生活の安定に繋がり、少しでも家計を助けることができる。

将来子どもが生計を立てていくために、とくに男子に何らかの形で「ウオナル」（手工芸の技術）を身につけさせるということは、ウイグル人社会の各家庭レベルにまで深く浸透した慣行であった。

しかも、ここで問題にしたい一九八〇年代以後の弟子入りの進展には、「改革・開放」路線が打ち出されて以後の中国における状況が色濃く反映されている。すなわち、八〇年代に政府によって導入された市場経済原理に基づく自由化によって、伝統的生産様式を基礎としつつも、農村手工業が、現金収入を得るための農家の副業として復活、発展しそのことが職人による新たな弟子入り教育の拡大に繋がったと推測される。

それでは、以上のような伝統的な弟子入り教育が、復活し一層進展したことは、フォーマルな学校教育にどのような影響を及ぼしたであろうか。端的に言えば、弟子入り教育の進展は、学校教育からの中途退学者を増加させ、より上級の教育機関への進学者の割合を減少させている。

農家に見れば、子どもを小学校の高学年から弟子入りをさせている理由として、子どもは小さいときは覚えが速く、抵抗なく技術を受容し、迅速に習得することができる。ところが大きくなると習得力が悪くなるだけでなく、それに自分の考えが芽生えて技術を覚えるのに集中できなくなる、という観念が強く見られる。歴史的に農村部に広範化していた弟子入り教育をめぐる農家の伝統的な意識の影響が、子どもの教育においても反映しているということであろう。

さらに、民族学校における、より上級の教育機関への進学が、弟子入りに比して、子ども将来にとって、またその農家が生計を立てていく上で、より有利な条件になるとは農家は認識していない。

中国における経済発展は、著しい地方間格差を内包しつつ進行してきた。辺境部に位置するこの新疆南部においては、大規模資本の外部からの進出やあるいは内発的な発展に基づく、目立った経済発展が顕在化しているとは言い難い。ウイグル人のバザール経済はウイグル人社会の内部において機能する小規模な民族経済にしか過ぎない。ここでは前述のように、「改革・開放」後の経済活動自由化の中で形成された、個人的な小規模商業や手工業生産を中心的な活動とする経済が維持されている。主にウイグル人相互の需要・供給関係に基づくことよって、ウイグル人社会特有の経済圏が存立しているのである。この民族経済圏では、絶えざる弟子入り教育によって、前近代的な職業技術者が再生産されるという構造が形作られており、近代的産業の労働に必要な科学技術知識の習得を学校教育において行う需要はほとんど生じない。すなわち、高度な近代的教育を受けたとしても、少なくとも日常的な生活空間とその周辺において、そこで得られた知識や資格を生かした職業に勤務できる機会は至って少ないのである。このような社会的状況は、子どもたちの教育や進路に関する親の考え方も規定している。要するに、大きな金銭的負担という対価を払ってまで、とくに男子に高学歴を身につけさせる必然性が薄いのである。

私のホータンでの調査でも、かなり前から、ウイグル医学での弟子入りが見られた。特に、高齢の有名な医者のところインタビューに行けば、必ず、何人かの若い弟子がいた。一九九六年ホータンでの調査で、三人の弟子を持って診療所を開いているウイグル医は次のように話している。「アラビア語で書かれた古典が教科書である。学校に行くとお金がかかる。自分はお金を取らない。以前は十年間ほどウイグル医学学校で教えていた。歯が悪くなり、講義が不自由になったからやめた。いままで一〇〇〇人以上の学生に教えた。この診療所で教えて、衛生士の資格をとれるようにしている。これからの人は試験が必要だろう。ホータンには一九七五年にウイグル医学学校ができて、ウイグル医学は発展している。祖父の代からウイグル医学をしていたことはわかっている。それ以前はわからない。祖父はイスラム学校で勉強しながら医学を学んだ。自分の子供もウイグル医学を診療所で修行している。」

これ以外、どのウイグル医のところに行っても、弟子の姿がみられた。ウイグル医学学校の教育体制が確立しても、むしろ弟子を志願する人は増えている。ウイグル医学自体が政府から公認され、ウイグル医を訪れる人は年々増加し、職業としても利益があるものになっている。バザールなどでの公認されていない薬売りを含めたら、こうした徒弟制の広がりはかなりなものと考えられる。むしろ、近代化によって減少するどころか、増加し

ている。

徒弟制と近代学校教育の学習システムは相反するところがある。このようにいまだに徒弟制が優勢なウイグルでは医学も学校教育とともに、徒弟制のなかで伝達されている。医療は近代医学においても、実践が重要なことは認識されている。言葉では伝えにくいことが医療の中には多くある。実践の中で見たり、聞いたりしながら、自らの身体で習得していかなければならないことばかりである。

漢語学習の進展

漢語学習熱の高まり、それと同時並行的に教育言語としてのウイグル語の地位が揺らいでいる。この新たな言語政策的状況はウイグル語をどこに導いていくのだろうか。さしあたり、このことは本論のテーマではないが、なぜ漢語学習がいままで効果を上げなかったのか、それを題材に、言語学習は言語でありながら、学校教育のように言語だけで学習させても効果がない、その問題を実践共同体、アフオーダンスなどの概念を使いながら、言語学習は身体を知覚とした身体知であることを論じてきた。

中国政府当局も今のままでは漢語学習の成果は上がらない認識したのか、新疆内地中高校という制度を二〇〇〇年から始め、内地の北京、上海などの学校に毎年一〇〇〇人程度の生徒を送り出している。そこで漢語を学び、他の科目も学んでいる。卒業したらほとんどの生徒は、内地の大学に進学する。二〇〇六年は三九九〇人を採用している。応募者は三〇九七八人であり、増加の傾向にある。例えば上海交通大学付属中学では二〇〇六年には四六名を受け入れている。そこで漢人の生徒と交流する中で漢語を習得させていく。

これは「状況に埋め込まれた学習」であり、新疆で行われている民族学校での漢語学習よりずっと効果的であろう。しかし、ウイグル語の力が失われることが懸念され、ウイグル人としてのアイデンティティが不安定になってくる。実践共同体ではアイデンティティの問題は重要であるが、外国語学習の場合アイデンティティと言語の関係の問題は不明なところが多い。新しい言語教育的な政策の試みは、始まったばかりであり、将来どのようなウイグル人が育ってくるかはわからない。しばらくはこのような変化に注目する必要があるだろう。

注

- (1) ホータンの事例は左記のサイトである。括弧の中の注釈は著者。
「民族教育（新疆編） 漢語学習塾和田」
<http://www.jszyw.cn/news/mzxw/200508/216.html>
- (2) カシユガルの事例は左記のサイトである。
「漢語熱看少数民族教育変化」
<http://www.xjnsk.cn/hsknews/News/200645114253.html>
- (3) E・J・ホブズボーム（浜林正夫他訳）、ナシヨナリズムの歴史と現在、大月書店、二〇〇一、四三頁。
- (4) 同上、四四頁。
- (5) 同上、一二四頁。
- (6) J・レイヴ & E・ウエンガー（佐伯胖訳）、状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―、産業図書、一九九三、三頁。
- (7) 同上、七頁。
- (8) James G. Greeno, Penelope Eckert, Susan U. Stucky, Patricia Sachs, and Etienne Wenger. Learning in and for Participation in Work and Society.
<http://www.ed.gov/pubs/HowAdultsLearn/summary.html>
- (9) 情報処理的なコミュニケーションの説明は左記のサイトを参考にして、引用した。
岡田美智男、「コミュニケーション」雑談における構成的な理解に向けて」
<http://www.mic.atr.co.jp/~okada/Reports/Draft.97.7.26.html>
- (10) 音声言語の機械認識については左記のサイトを参考にして、引用した。
亘理誠夫、「音声認識・合成と自然言語処理の研究開発動向」
<http://www.nistep.go.jp/achiev/ftx/jpn/stfc/stt012j/feature3.html>
- (11) この章に関しては下記のサイト参考にして、引用した。
岡田美智男、「雑談を科学する」
<http://www.mic.atr.co.jp/~okada/Reports/Bit98.12.pdf>
- (12) リズワン・アブリミテイ、中華人民共和国におけるウイグル人の学校教育に関する研究、（博士論文草稿、九州大学、二〇〇七）、二二五―二三〇頁。